慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | エスニシティと暴力の記憶：<br>アッサムの反外国人運動におけるアイデンティティの構築 |
| Sub Title | |
| Author | 木村, 真希子(Kimura, Makiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2004 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：<br>人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.58 (2004. ) ,p.94- 98 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 平成15年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000058-0094 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いた。こうした運動のなかで紡ぎだされた野間の生活記録論は，作家という専門性の立場から，民衆が生活を「書く」ということのもつ意味を本質的に解き明かしたものであり，鶴見のそれとは異なり，論としても本格的な検討に値するものであることを明らかにした。

**反省と今後の課題**

本研究は，1950 年代における知識人の啓蒙構造とそれを支える思想に照準を合わせて歴史的に検討することで，当該期の日本社会に固有の意味を見出そうとした。しかしながら，論文や学会報告という形で課題意識が表現されたもの（「1950 年代における鶴見和子の生活記録論」『人間と社会の探求』第 56 号，2003 年，「野間宏の生活記録論」日本社会教育学会第 50 回研究大会自由研究発表，「「生活記録」論にみる知識人の自己認識構造――1950 年代における鶴見和子と野間宏」社会文化学会第 6 回全国大会自由論題報告）を自己点検する限りでは，必ずしも 1950 年代の社会・文化に対する歴史像を十分には提示しきれず，批評的な思想論的な性格が強くなっている。その意味で社会史的研究として成立仕切れていない。

その原因の一端は，「知識人」の概念を本研究では自明のものとして議論し，啓蒙主義の反省の問題は，知識人と民衆の「出会い」の問題として議論した点にある。知識人と民衆の「出会い」といったときに念頭においていたのは，近年の教育学で展開されている「おとなは子どもと出会えるか。子どもはおとなと出会えるか」（竹内常一）という問題であった（拙稿「「学級づくり」の社会学的考察―ある小学校教師の総合学習の実践を事例にして」『現代のナショナリズム――哲学的な解読』青木書店，2003 年も参照）。知識人と民衆の関係性を考える上で，教師と子どもの関係性を鏡にすることの意義を否定するわけではないが，歴史研究として成立させるためには，啓蒙思想と社会構造との関連性を検証することが，対象に即してなされる必要がある。知識人による「言説」を成り立たせる根拠を歴史過程とかかわらせて論じる方法的工夫や対象の設定を行い，歴史叙述を行うことが今後の課題である。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

# エスニシティと暴力の記憶

## ――アッサムの反外国人運動におけるアイデンティティの構築――

木　村　真　希　子*

**1.　研究の目的**

本研究の目的は，インドのアッサム州における反外国人運動がエスニック集団間関係に及ぼした影響を考察することである。アッサムでは 1979 年から 1985 年まで，主にバングラデシュ（旧東パキスタン）からの不法移民に対する大規模な反対運動が起きた。この運動は学生団体によって指導され，運動の方法は非暴力・平和主義をとった。しかし 6 年間続いた運動の中では多くの嫌がらせや暴力事件が発生し，特に 1983 年に中央政府によって強行された州議会選挙では多くの死傷者がでた。

アッサムはこの運動が起こる以前の 1970 年代後半までは，武力紛争や独立運動の多いインド北東部の中では比較的平穏であり，インド国民国家に統合されていると思われていた。しかし，運動の指導者

が1985年にインド中央政府との間でアッサム協定を締結したことにより，平和的に解決した後，アッサムでは武力紛争が頻発するようになり，その傾向は現在でも続いている。

本研究では，運動の指導者，新聞報道，都市中間層・農村部での人々の語りなど，さまざまなレベルにおける「他者」表象を分析することにより，エスニックな境界が構築されていく過程を分析する。エスニック集団が運動を展開する際，しばしばある特定の「他者」を仮想敵とし，それに対応して自らの集団を規定することが論じられてきた。アッサムの運動においても，運動の指導者は特定のエスニック集団を敵と見なし，その集団と相対するものとして自己のエスニシティを規定する。こうしたある特定のエスニック集団を敵と見なす言説は運動の指導者が大衆を動員する際にしばしば顕著に現れるが，これが都市中間層や農村部の人々によってどのように理解され，かつ消費されているのかが本研究の分析の中心となる。

こうした「他者」の表象は，暴力事件の記述や語りにおいて最も顕著に見られる。暴力事件に関する新聞報道や人々の記憶は誰が被害者であり，誰が加害者であるかという規定を行うことにより，エスニックな境界を分析する上で格好の対象となる。そのため，本研究では特に虐殺やその他の暴力事件に関する記述や語りを取り上げ，それに対する運動の指導者や人々の語りにおける「他者」の表象，特にエスニックな属性の形容に着目する。

アッサムにおいては新聞が流通するのは主に識字率の高い都市部であるため，新聞の影響を比較することを考慮に入れ，都市中間層と農民層に対してそれぞれ暴力事件の記憶に関する質的調査を行った。これらの調査は平成13年度，14年度にわたって行われ，平成15年度は調査で収集されたデータに基づく分析を主に行い，先行研究や暴力の記憶とエスニシティに関する理論に対してどのような知見が得られるかを考察した。以下，二つのケース・スタディの分析と，今後の課題について述べたい。

## 2. 新聞と集合的記憶：都市中間層における「他者」と「自己」の表象[1)]

### 2-1. 新聞報道の分析

反外国人運動において，先行研究ではアッサム州と西ベンガル州それぞれの新聞がコミュナルな報道を行い，事態を悪化させたという指摘されてきた。筆者はこれらの先行研究の指摘を踏まえ，アッサム州と西ベンガル州で発行された英字新聞と現地語新聞（アッサムではアッサム語，西ベンガルではベンガル語）における暴力事件の報道のテクスト分析を行った。具体的には四つの暴力事件を取り上げ，その中で特に誰が被害者であるか，誰が加害者であるかという点に焦点をあてて分析した。

アッサムの新聞は，被害者を「土地の人間」「学生運動参加者」として報道し，それに対して加害者を「警察」や「軍隊」など，政府による弾圧として位置づける一方，「バングラデシュ人」などの「移民」や「外国人」が「土地の人間」を襲うという構図を描いていた。一方，ベンガルの新聞は，被害者を「ベンガル人」，「言語的少数者」などとして，アッサムでは少数者であるベンガル人移民が被害者である事

表1. アッサムと西ベンガルの新聞において報道された被害者と加害者の属性

| | 被害者 | 加害者 |
|---|---|---|
| アッサム | 土地の人々，学生，若者，運動参加者，土地のインド人 | 警察，軍隊，外国人，バングラデシュ人，移民，言語・宗教的少数者 |
| 西ベンガル | ベンガル・ヒンドゥ，ベンガル人，非アッサム人，言語的少数者 | アッサム人，反社会分子，運動指導者 |

件を強調し，加害者を「アッサム人」や「運動指導者」であると報道して，ベンガル人移民がアッサムで迫害されているという図式を強調した。これを分類したのが表 1 である。

このように，アッサム州と西ベンガル州の間では反外国人運動をめぐって対立が存在することが新聞報道に表れている。これは，ベンガル側が反外国人運動をベンガル系移民排斥と見なし，厳しく批判したためである。また，アッサム州内のホスト・コミュニティとベンガル系移民の間にも運動の是非をめぐって対立が生じた。こうした新聞報道とそこに現れたアッサム・ベンガルの地域対立を念頭に置き，アッサム州内のアッサム語話者とベンガル語話者に対して聞き取り調査を行った。

### 2-2. 都市中間層への調査

アッサムにおける主な都市中間層はアッサム語話者とベンガル語話者に大別できる。前者は運動を支持し，後者は運動に批判的であった。また，両者は地理的にすみわけており，ベンガル人の多いアッサム南部では運動はあまり影響力を持たなかった。都市中間層への聞き取り調査は，この二つの言語別集団に対して行い，それぞれのアッサム人とベンガル人それぞれ 10 人に対して行った。都市中間層は両集団とももヒンドゥ教徒が多数だが，調査対象者にはムスリムも 1 名ずつが加えた。

調査の結果，当時の暴力事件について，都市部の人々は主に新聞を媒介として情報を得ていること，そのため運動への賛否にかかわらず，調査対象者の記憶や意見の多くは新聞で展開された議論と類似していることが明らかになった。「反外国人運動」という問題の捉え方や暴力事件の経緯についての情報など，新聞の影響が大きく見られた。

暴力事件の記憶に関しては，アッサム人とベンガル人の間に顕著な違いが見られた。ベンガル人は「罪のないベンガル人」が運動に巻き込まれて死亡したという事件について覚えていると答えたものが 10 名中半数に達したのに対し，アッサム人の間では「多くの事件がおき，多くの人が死んだ」と答えるものが多く，特定の事件の詳細について語ろうとするものは少なかった。

アッサム人とベンガル人の間の暴力事件に関する語りの違いは，それぞれの集団の運動に対する立場の違いからきていることは明らかである。両集団の都市中間層は，新聞という媒介を通して運動や暴力事件についてそれぞれの集団内で記憶を共有しているといえるだろう。このように，都市中間層の間では，エスニック・アイデンティティと密接に関連する暴力の記憶の形成に新聞が重要な役割を果たしていることが明らかにされた。

## 3. 虐殺の記憶：農村部におけるオルタナティブな「自己」と記憶の政治[2)]

農村部での調査は，ネリーの虐殺の現場となった村とその周辺で行った。ネリーの虐殺はアッサムの反外国人運動の中で一番大きな事件であり，全国的にも報道され，さまざまな本の中で言及されてきた。調査では，虐殺の被害者であったベンガル・ムスリム移民，加害者とされているティワというトライブ，そしてこの地域の運動指導者の三者を対象とした。

ネリーの虐殺に関して，アッサムの研究者やジャーナリストによる一般的な解釈は，「ムスリム移民が長年にわたってティワの土地を収奪した結果，ティワが運動と選挙ボイコットを契機に移民を虐殺した」というものであった。しかし，植民地時代の資料を調べてみれば，移動耕作を行っていたティワの土地を森林保護地としてトライブから収奪したのはイギリス植民地政府であり，ティワの土地の収奪と移民の因果関係は無関係ではないものの，直接的な収奪があったというわけではない。現に，ティワの

村人は土地をめぐるトラブルを虐殺の原因としてあげることはなく，むしろ運動の指導者が虐殺の指揮をとったと主張している。

この背景には，ティワが近年，自治を求めて運動していることが関係している。ティワは反外国人運動を支持し協力したが，その結果誕生した政権はティワの利害を代弁しないと批判し，自らの政治的・経済的後進性に不満をもっている。そのため，ティワにとっての他者はアッサム人であり，ネリーの虐殺もその文脈で記憶されている。すなわち，アッサム人はティワを利用したが，責任を取らずにティワに責任をなすりつけた，というのが彼らの主張であった。

一方，被害者であったムスリム移民は，アッサム人やティワが攻撃者であったとし，自らのこうむった被害を嘆きはするものの，アッサム人を強く非難し他者化することはしない。移民であり，トライブと違って土地権を声高に主張できない彼らは，アッサム人と自らの間の差異を強調することによって，アッサムに居住する正当性そのものを失うことを恐れている。そのため，ティワと違ってアッサム人と差異化を図り，自らのアイデンティティを主張することは今の段階では避けている。このように，エスニック集団間の暴力事件の当事者が事件やその原因に対して行う解釈はエスニシティの構築につながっている。

## 4. 今後の課題

以上，アッサムの反外国人運動における暴力の記憶について，都市中間層と農民層の事例をそれぞれ分析した。現在までの研究では都市中間層と農民層をそれぞれ個別に考えてきたが，両者の暴力事件に関する語りのスタイルには大きな違いが存在する。この理由として，都市中間層の間では暴力の記憶は新聞という共通のメディアを通じて形成される一方，農民層の間では村落の対面的コミュニケーションやうわさを通じて形成されるということがあげられよう。いずれにせよ，都市中間層と農民層の間の意識の乖離は，両者のアイデンティティに隔たりをもたらし，結果として農村部に基盤を置くトライブが従来のアッサム人の一部としてのアイデンティティを捨て，トライブとしてのアイデンティティを追求するという重大な結果をもたらしている。

筆者は特に，ネリーの虐殺に関して，「ムスリム移民が長年にわたってティワの土地を収奪した結果，ティワが運動と選挙ボイコットを契機に移民を虐殺した」という従来のジャーナリストや学者の間でほぼ定説となっていた解釈が，被害者・加害者の双方にまったく共有されていなかったことに注目している。これは前述のように，ティワやムスリム移民がアッサム人と異なる利益を持つ集団であることも関係しているが，同時にティワやムスリム農民の多くが農民層で非識字層であることも関係していると思われる。

このように，反外国人運動の分析においては，都市中間層と農民層の間の乖離と格差が重要なファクターであることが今までの調査の分析から明らかになった。今後の課題として，都市中間層と農民層の乖離がエスニック集団のアイデンティティ形成にどのような影響を与えたのかについて焦点をあてつつ，暴力の記憶とエスニシティの関係について更なる考察を深めていく予定である。

## 注

1) 都市中間層の集合的記憶については，Kimura, Makiko (2003) 'Collective Memory of Violence: Ethnicity and Opinion Formation in the Brahmaputra Valley and the Barak Valley, 1979–1985' in *Proceeding of*

*the North East India History Association*, Shillong, India にまとめた。

2) ネリーの虐殺については以下の論文に成果を発表した。Kimura, Makiko (2003) 'Memories of the Massacre: Violence and Collective Identity in the Narratives on the Nellie Incident', in *Asian Ethnicity*, Vol. 4, No. 2.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

# 北・南/体壁系・内臓系
## ——「身体の 2 重性」——

松 尾 信 明*

私は或る出版社から旅費をもらい，津軽旅行を企てた。その頃日本では，南方へ南方へと，皆の関心がもっぱらその方面にばかり集中せられていたのであるが，私はその正反対の本州の北端に向って旅立った。

（太宰治「十五年間」）

### 1. 体壁系・内臓系

#### 1-1. 身体

わたしは，解剖学者，故三木成夫の研究に依拠する。三木によれば，人体は「内臓系」（＝植物性器官，splanchnon）と，「体壁系」（＝動物性器官，organon）とに分けられる。ここに，「身体の 2 重性」がみられる。

人体にみられる植物的機能とは，吸収-循環-排出の諸器官が担い，特に循環系が中心である。人体にみられる動物的機能とは，感覚-神経-運動の諸器官が担い，特に神経系が中心である。体壁系は，その感覚機能と運動機能を仲介する神経系の中枢部，脳髄によって，代表される。これに対し，内臓系は，その吸収機能と排泄機能を仲介する循環系の中心部，心臓によって，代表される（三木 1992a: 146）。

つまり，内臓系の動きは，心臓で代表され，体壁系の動きは，脳で代表される。心情と精神は，この心臓と脳に由来したもので，それぞれ人体を 2 分する“植物的ないとなみ”と“動物的ないとなみ”を象徴する（三木 1997: 38）。以上から，体壁系-脳-mind, 内臓系-心臓-feelings, ということが言える。

従来の身体論では，〈身体〉のうち体壁系のみに分析が偏り，内臓系は見落とされていたと言いうる。人間の身体とは，体壁系と内臓系，ふたつあわせて〈身体〉なのである。そうであるならば，「身体論」というものも，それを反映したものであらねばならないはずである。

#### 1-2. 身体論

湯浅 (1996) は，こうした体壁系と内臓系という，「身体の 2 重性」に着目している。従来の身体論，それは特にメルロ＝ポンティを代表とする，と言ってもよいであろう。メルロ＝ポンティもまた，視覚，触覚，運動，といった体壁系に関する研究は残していると言えようが，内臓系に関してはその視野に入っていなかったと言えると思われる。身体の中，それを「器官の詰まった暗闇」(Merleau-Ponty 1964＝1989: 192) と記述する彼にとって，内臓系とは言わば，「ブラックボックス」のようなものであったの